

申年を迎えて

これまでサルサルのすむ国を歩いて、三猿三猿が日本だけの言い伝えではないことがわかった。中南米にも、アジアにも、アフリカにも三猿の像があり、人々に親しまれているのだ。意味はたいてい「見ざる、聞かざる、言わざる」で、サルたちが座つてその場所を手で隠している。中には、股間を手で隠しているサルサルが加わっている四猿の像もある。

この教訓を誰に向けているかは、子ども、おとな、妊婦など場所によつて異なっているが、おおかた子どもに対して「悪いことは見ない、聞かない、言わないようにしよう」という教えであるようだ。それは悪いことは生まれつき理解できるものではなく、学習しなければならぬからである。まだ道徳観念のない未熟な子どもにも悪いことを示せば、それが悪いとわからないうちに実行してしまうという戒めなのだろう。

なぜこの教えが他の動物ではなく、サルなのかと言えば、それは姿かたちや五感が人間によく似ているせいである。もうひとつ、「猿真似」という言葉がある。サルは他人のやっていることを意味もわからず真似してしまう。だから、他人のすることを参考にする前に、猿真似をせずに、じっくりその意味を考へて行動しましょうという教訓が暗示されているのかもれない。

山極 壽一

やまぎわ じゅいち
プロフィール
1952年東京生まれ。京都大学総長。理学博士。京都大学大学院理学研究科博士後期課程単位取得退学。カリソケ研究センター客員研究員、日本モンキーセンター・リサーチフェロー、京都大学畜産学類研究所助手、京都大学大学院理学研究科教授を経て現職。著書に、『京大式おもしろ勉強法』(朝日新聞出版)、『サル化する人間社会』(集英社)、『家族進化論』(東洋館出版)、『暴力はどこからきたか』(NHKブックス)などがある。

しかし、最近の研究でサルは「猿真似」ができないことがわかってきた。たしかに、サルも仲間のやっている行動を見て共感する能力はある。でも、さまざま行動を同調させるには、ひとつひとつの行動の意味と、それらの行動が組み合わさつて達成される目的を理解しなくてはならない。サルは食物をおいしく食べるなどといった目的を理解しても、それに連なる行動の組み合わせや意味は試行錯誤で習得するしかない。意味を確かめず他人の行動をコピーできるのは、人間だけに与えられた能力なのである。

だから、三猿はつい「猿真似」をしてしまいがちな人間の子どものだけに意味のある教訓なのだ。現代のIT社会では、子どもたちが危険な情報にアクセスしてしまいがちで、三猿の教訓は風前の灯である。情報を隠すより、むしろおとなたちが率先して悪い行いや危険なことを語つて聞かせることが必要だろう。人間の高い同調能力は、他人のやっていることに感動したり、強く共感したりする際に現れる。そのとき歯止めになるのは、文字情報ではなく、自分の信頼できる人が生きた言葉で語つた経験である。社会の価値観が多様化する昨今、一度立ち止まつて考え、他者の意見に耳を傾けることがこれまでに以上に必要になるだろう。申年まねねんを期に、真の人間らしい営みとは何かについて考へてみたいと思つた。

月刊 みんぱく

1月号目次

- | | |
|---|---|
| <p>1 エッセイ 千字文
申年を迎えて
山極 壽一</p> <p>特集 さる</p> <p>2 サルと人との絆
池谷 和信</p> <p>4 食べられるサル、協力するサル
五百部 裕</p> <p>6 ハヌマーン——神になったサル
三尾 稔</p> <p>7 一筋縄ではいかない霊長類の色覚
河村 正二</p> <p>9 変わり三猿コレクション
中牧 弘允</p> <p>10 ○○してみました世界のフィールド
「沙漠の船」の乗り心地
西尾 哲夫</p> | <p>12 みんぱく Information</p> <p>14 味の根っこ
ムトリ
溝内 克之</p> <p>16 文化遺産おもてうら
「聖地」と「遺跡」のあいだ
——ブツダガヤーにおける寺院管理
前島 訓子</p> <p>18 音の居場所
ジェンダーを超える踊り——ナルタキ・ナタラージ
寺田 吉孝</p> <p>20 人間学のキーワード
ケア
戸田 美佳子</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|---|---|